

一般口演

(4)『難経』における「脾…主裏血」について

○草野美和子¹⁾, 斉藤 宗則²⁾, 和辻 直²⁾, 篠原 昭二²⁾明治国際医療大学大学院伝統鍼灸学¹⁾, 明治国際医療大学 伝統鍼灸医学教室²⁾

要 旨

【目的】

東洋医学における脾には統血作用があり, その文献的源は『難経』四十二難の「脾…主裏血」とされている。しかし, 源とされる理由が不明であり, 「脾…主裏血」および注釈書に関する詳細な調査や内容検討は, 日本だけでなく中国でも行われていないため, 「脾…主裏血」について調査した。

【方法】

『難経』のテキストには日本内経医学会刊行の江戸・慶安5年(1652)復刻本である『王翰林集註黄帝八十一難経』を, また目録で確認できた歴代の注釈本を用いて「脾…主裏血」の意味を検討し, 現代の統血作用との相違を考察した。

【結果・考察】

「脾…主裏血」を字義から解釈すると, 脾は…血を包むことを主宰する, 脾は…包んだ血を主宰する, の二つが考えられる。

「脾…主裏血」は四十二難に記載されており, 脾の重さや幅, 長さおよび「散膏」というものが付属することが示され, 「主裏血」後に「温五藏」と「主藏意」があることから, 「主裏血」と関連する可能性が示唆された。また, 『難経』には脾と血の直接的関係を示す条文は他になく, これらの関連を明らかにできなかった。

次に, 注釈書は確認できたものが160書, 現存するものが144書であり, そのうち入手できたのは76書である。「裏血」には大きく「包裹血」「以散膏裏血此総血云」「統之使不散也」「其ノ散膏ニヨツテ心血ヲココニウケテツツムヲイフナリ」の四種の解釈があり, 言葉の違いや散膏の関与の有無, 血の種類に相違があるが, すべて脾は血を包むことを主宰するという意味で解釈されていた。

「散膏」については, 大きく「アブラ」と「津液之不凝者」という解釈があったが, 裏血との関連についてはさらなる検討が必要である。「温五藏」については, 脾が水穀の気を受けて温煦作用のある気を全身に運ぶという解釈が有力と思われた。「主藏意」については「裏血」との関連を指摘するものもあったが, 「裏血」とは関連しないものと考えられた。

現代の日中で使用されている教科書などでは統血を血が脈内を円滑に流れ, 外に漏れないようにする作用としており, 「裏血」と類似する部分はあるが, 「散膏」や「温五藏」との関連を考慮すると, 「裏血」を統血の源とするにはさらなる調査検討が必要と考えられた。